〔1375〕

氏名（生年月日）	戴（タイ）　暁晨（ギョウシン）　（1986 年 1 月 27 日）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	文博甲第 146 号
学位授与の日付	2021 年 7 月 29 日
学位授与の要件	中央大学学位規則第 4 条第 1 項
学 位 論 文 題 目	**村上春樹作品における＜個人とシステム＞**
論 文 審 査 委 員	主査　宇佐美　毅
	副査　山下　真史・千田　洋幸

内容の要旨及び審査の結果

1．本論文の目的と構成

最初に本論文『村上春樹作品における〈個人とシステム〉』の目的と構成を示す。

本論文の根底にあるのは、村上春樹作品の先行研究でとらえられてきた「デタッチメントからコミットメントへ」という図式の見直しである。初期の村上春樹作品は、狭い人間関係に自分たちを閉じてしまう内向的、自閉的な人物たちが描かれていることが多かった。その時期の村上春樹作品の特徴を「デタッチメント」と呼び、1990 年代以降、社会的な事件、ときには歴史や戦争を題材にするようになる村上春樹作品の特徴を「コミットメント」と呼ぶのが従来の研究の通例であった。とはいえ、そのような理解はあまりに図式的すぎて、今日ではもはや有効とは思えないが、それでは村上春樹作品の変化をどのように意味づけるかという問題については、現在もさまざまな研究や評論活動がおこなわれていて、決定的な方向性が見出されていない。

以上のような村上春樹研究の現状に対して、本論文は、「デタッチメントとコミットメント」を対立的にとらえないことを目指している。村上春樹と河合隼雄の対談の中で用いられた「コミットメントの条件には、相当な「個の掘り下げ」が必要だ」という考えを手がかりに、「個の掘り下げ」をおこなう初期作品の世界を「コミットメント」の条件となるものとして論じている。そのように考えた場合に立ち上がってくるのが、本論文のタイトルとなっている村上春樹作品における「個人とシステム」という課題なのである。

有名なエルサレム賞受賞スピーチの中で、村上春樹は「壁と卵」の比喩を用いて「個人とシステム」の問題を世界に向けて発信した。その「個人とシステム」の課題こそが村上春樹作品の根底にあるという問題意識のもと、本論文は 5 章にわたって村上春樹作品を考察している。

その章のテーマとは、「システム」「少女と暴力性」「サブ・システム」「悪」「システムに立ち向かう人たち」である。「システム」を論じるために『ダンス・ダンス・ダンス』『ねじまき鳥

クロニクル』『１Ｑ８４』の３作品を、「少女と暴力性」を論じるために『ダンス・ダンス・ダンス』のユキ、『ねじまき鳥クロニクル』の笠原メイ、『１Ｑ８４』のふかえりの３人を、「サブ・システム」を論じるために『１Ｑ８４』と「柳屋敷」に集まる人びとを、「悪」を論じるために『ねじまき鳥クロニクル』の綿谷ノボル、『１Ｑ８４』の牛河利治、『騎士団長殺し』免色渉の３人を、「システムに立ち向かう人たち」を論じるために『１Ｑ８４』の深田保と牛河利治を、それぞれ分析対象に選んでいる。このように、本論文の章はいずれも複数の作品や人物を分析対象とし、それぞれの課題ごとに村上春樹作品の変化の様相を考察している。それと同時に、５つの章の考察を総合することによって、より多角的に村上春樹作品における「個人とシステム」という課題が追究される、というのが本論文の大きな構想となっている。

以上のような本論文の目的と構想を実現するために、本論文は以下のような構成をとっている。

序論

一章　村上春樹作品におけるシステムの有り様
　　――『ダンス・ダンス・ダンス』、『ねじまき鳥クロニクル』、『１Ｑ８４』をめぐって
　はじめに
　一　『ダンス・ダンス・ダンス』における「高度資本主義社会」システムと「僕」について
　二　『ねじまき鳥クロニクル』中の「208 号室」をめぐって
　三　『１Ｑ８４』に潜む時間の変更について

二章　村上春樹作品における少女と「暴力性」
　はじめに
　一　『ダンス・ダンス・ダンス』のユキと『ねじまき鳥クロニクル』の笠原メイ
　二　『１Ｑ８４』のふかえりと「暴力性」
　三　「魔女」の復讐 ―― ふかえりの側面について

三章　村上春樹『１Ｑ８４』におけるサブ・システム
　はじめに
　一　サブ・システムとしての「柳屋敷」
　二　「柳屋敷」と「さきがけ」、二つのサブ・システムの成立について
　三　「柳屋敷」という名称と「蝶」をめぐって
　四　「広汎な正義」に潜むカルト的なもの ―― 擬似宗教の「柳屋敷」をめぐって
　五　「信者」から「棄教者」へ ―― 擬似宗教の闇に彷徨う青豆について

四章　「悪」との対決 —— 綿谷ノボル、牛河利治そして免色渉をめぐって
　はじめに
　一　「悪」を持つ三人について
　二　制御不能な欲望 —— 綿谷ノボルの「悪」
　三　メッセンジャーの「悪」—— 牛河利治をめぐって
　四　システムの濫用 —— 免色渉の持つ「悪」について

五章　教団システムに立ち向かう人たち
　　——『１Ｑ８４』における深田保と牛河利治をめぐって
　はじめに
　一　総合的な「さきがけ」と闇が深い二人
　二　死に辿り着く深田保と牛河利治について
　三　深田保と牛河利治の死をめぐって

結論

2．本論文の要旨

本論文では、村上春樹作品を 5 章に分けて論じている。これまでのさまざまな先行研究では、村上春樹文学の特質を、作品ごとに論じる方法、時間軸に沿って論じる方法、ジャンルごとに論じる方法などがおこなわれている。本論文ではそうした方法を採らず、「システム」「少女と暴力性」「サブ・システム」「悪」「システムに立ち向かう人たち」といったテーマごとに複数の作品や人物を論じている。

以下、本論文の要旨を記す。

まず序論では、本論文の趣旨を述べている。村上春樹作品については、「デタッチメントからコミットメントへ」という変化の図式で語られることが多く、初期の村上春樹作品を「デタッチメント」の時期、1990 年代以降を「コミットメント」の時期とされることが多い。しかし、本論文では、「デタッチメント」と「コミットメント」を二項対立的に考える図式を再検討し、5 つのテーマから村上春樹作品にあらわれた変化を考察している。それらを総合して、村上春樹にとっての「システム」の意味を明らかにするという構想を示している。

一章　村上春樹作品におけるシステムの有り様
　　——『ダンス・ダンス・ダンス』、『ねじまき鳥クロニクル』、『１Ｑ８４』をめぐって

エルサレム賞の受賞スピーチとして有名な「壁と卵」発言からもわかるように、システムをめぐ

る問題は村上春樹作品の根底にある課題といえる。「物語を作る目的は、私たちの生命を守るために警告を発し、システムが私たちの精神をもつれさせ、卑しめることを防ぐことなのです」という村上春樹の発言もあり、この課題の重要性は明らかである。ただし、システムの描き方には時期による変化があり、その特徴をよく示しているのが、『ダンス・ダンス・ダンス』『ねじまき鳥クロニクル』『１Ｑ８４』の３作である。最初にシステムをめぐる問題提起をおこない、次の作品でその課題をいったん解決し、さらに次のレベルの課題を提起するという構造になっていることを、3 作の分析から明らかにしている。

二章　村上春樹作品における少女と「暴力性」

村上春樹作品においてシステムが描かれる場合、それはしばしば暴力的な要素を持って描かれている。そのようなシステムから人々が逃れようとしても、システムの暴力性は強固に存在している。この問題を、不登校の生徒として学校から逃れたユキ（『ダンス・ダンス・ダンス』）、同じく学校を離れている笠原メイ（『ねじまき鳥クロニクル』）、そして、カルト教団から逃れた深田絵里子（『１Ｑ８４』）から考察しているのがこの章である。ここで少女たちが暴力から逃れようと努める一方で、深田絵里子のように逃れてきた教団にダメージを与えることでしか暴力から逃れることができないという、逆説的な関係があることを明らかにしている。

三章　村上春樹『１Ｑ８４』におけるサブ・システム

システムはすべてのものをそこに組み込むわけではなく、システムから外れてしまうことがしばしば生じる。それをすくい取るもう一つのシステムとして、サブ・システムを考えることができる。その場合、村上春樹自身が語るサブ・システムにもっとも近い存在は、『１Ｑ８４』の「柳屋敷」である。「柳屋敷」はメイン・システムから外れた人々を受け入れる一方、システムに対して暴力的にかかわるなど、システムを脅かすこともある。この点を論じることによって、「『１Ｑ８４』においての「柳屋敷」がサブ・システムの役割を果たしている一方で、システムを脅かしかねない危険な存在になっていることを明らかにしている。

四章　「悪」との対決 —— 綿谷ノボル、牛河利治そして免色渉をめぐって

初期の村上春樹作品は、気の合った者同士が狭い人間関係に自分たちを閉じてしまう内向的、自閉的な人物たちが描かれていることが多かった。その意味では、人間関係の中に葛藤や対立も少なかったことになる。しかし、特に『ねじまき鳥クロニクル』以降の作品には人間同士の葛藤や対立が描かれるようになり、特に人間の内部に潜む「悪」とそれへの対抗が重要な課題となっていく。そのように考えた場合、『ねじまき鳥クロニクル』の綿谷ノボル、『１Ｑ８４』の牛河利治、『騎士団長殺し』の免色渉を、村上春樹作品に描かれた「悪」の系譜として捉えることができる。そのことによって、既成の「悪」に対抗する主人公たちを描く作品から変化し、『騎士団長殺し』では「既成の悪」という構造自体が解体されていくことが示されている。すなわり、「悪」と正面から戦

うことよりも「悪」の内部を見極めようとする作品へと変化していくことが、この章の考察によって明らかになっている。

五章　教団システムに立ち向かう人たち ――『１Ｑ８４』における深田保と牛河利治をめぐって

1995 年地下鉄サリン事件以降の村上春樹は、カルト教団に対する関心を特に強めていく。その姿勢は『アンダーグラウンド』や『約束された場所で』などのルポルタージュ作品に明確に示されているが、小説の中では『１Ｑ８４』の中で大きく取り上げられている。しかし、その場合のカルト教団である「さきがけ」を単純に「悪」として位置づけるのではなく、カルト教団の側にいる深田保と牛河利治によって、カルト教団の力にいかにかかわるかの問題として論じている。カルト教団の教祖でありながら、自らの死をもって教団を牽制した深田保と、カルト教団に雇われて働いたために命を落とした牛河利治を考察することで、カルト教団のシステムの強固さとそれへの対抗の可能性をこの章で明らかにしている。

結論

ここまで第一章から第五章までの考察を通して、村上春樹作品における「個人とシステム」のあり方が詳細に検討されてきた。結論の章ではそこまでの過程が要約されるのと同時に、そのことの意味づけをおこなっている。そこで示されたのは、村上春樹作品が追究した世界において国境が希薄化することについてである。村上春樹の「個人とシステム」においてのシステム批判は必ずしも独特なものではない。しかしながら、システムへの破壊的攻撃的な手段に比べて、村上春樹はむしろ牽制的な手段を強調している。さらに、特別の存在を前面に打ち出す従来のシステム批判のあり方に対し、さまざまな個人に根ざした群像劇的なあり方を示したことも、村上春樹の「個人とシステム」観の特徴といえる。こうした特徴があることによって、村上春樹作品が世界中の読者たちの心に響いていったことを最後に示している。

３．本論文への評価

本論文は多くの点で重要な意義を有している。

最初に意義として挙げられることは、村上春樹作品の先行研究でとらえられてきた「デタッチメントからコミットメントへ」という図式を見直したことである。先に触れたように、「デタッチメントからコミットメントへ」という村上春樹作品を理解するための構図は、あまりに図式的すぎて、今日ではもはや有効とは思えないが、それでは村上春樹作品の変化をどのように意味づけるかという点については、現在もさまざまな研究や評論活動がおこなわれていて、決定的な方向性が見出されていない。そのような課題に関して、村上春樹と河合隼雄の対談の中で用いられた「コミットメントの条件には、相当な「個の掘り下げ」が必要だ」という考えを手がかりに、「個の掘り下げ」をおこなう初期作品の世界を「コミットメント」の条件となるものとして論じている。そのように

考えることによって、対立的に捉えられてきた「デタッチメントからコミットメントへ」という図式を統合的に考察したことは、本論文の第一の意義として指摘することができる。

次に意義として挙げられることは、従来の村上春樹研究とは異なる方法で、村上春樹作品の全体像をとらえようとしたことである。従来の村上春樹研究においては、村上春樹文学の特質を、作品ごとに論じる方法、時間軸に沿って論じる方法、ジャンルごとに論じる方法など、さまざまな方法がおこなわれてきた。本論文では従来からあるそれらの方法を採らず、「システム」「少女と暴力性」「サブ・システム」「悪」「システムに立ち向かう人たち」といったテーマごとに複数の作品や人物を論じるという方法を採っている。こうした方法によって可能になったことは、村上春樹作品の総体を複層的に意味づけることである。村上春樹作品における「個人とシステム」という課題はややありふれたテーマともいえるが、それを単純に作品ごとに論じたり時代順に論じたりするのではなく、5つの課題ごとに村上春樹作品の変化を意味づけ、さらにそれを総合して考えるという方法を採ることによって、従来の研究にはない多様な観点を含み込む研究を実現して見せている。この点を第2の意義として指摘しておきたい。

第2の意義とも関連するが、従来の研究では必ずしも重視されていない人物の意味を明らかにしたことも、本論文の重要な意義として挙げておきたい。『ダンス・ダンス・ダンス』のユキや『ねじまき鳥クロニクル』の笠原メイは、従来の研究でそこまで大きく取り上げられる人物ではなかった。それを「少女と暴力性」という着眼によって、村上春樹作品の変化を示す重要な存在として意味づけることに成功している。さらに『１Ｑ８４』の牛河利治は、ＢＯＯＫⅢで視点人物の１人になる重要人物ではあるものの、カルト教団のシステムとの関係がここまで追究されることはあまりなかった。こうした副次的な人物たちを考察の前面に据え、従来とは異なる意味を明らかにしたことも、本論文の重要な意義として挙げておきたい。

このように、本論文は従来の村上春樹研究にはない新しい発想から考察を進めており、研究史において重要な意義を持つ論文として評価することができる。

4．本論文の課題

本論文は、前章に示したような多くの意義が認められる反面、いくつかの課題も指摘しておきたい。

本論文は、村上春樹作品の全体像を5つのテーマから分析しているところに特徴があり、その点が長所になっていることは間違いない。しかし、その反面として、個々のテーマごとに村上春樹作品が切り取られていて、その全体像が十分に焦点を結んでいないように感じられる部分がある。同じように、個々の作品分析が丁寧におこなわれているのに対して、論文全体として「個人とシステム」という課題への追究に物足りなさが感じられる。その意味から「結論」の章で全5章のまとめを心がけてはいるが、やや不十分に終わっている感は否めない。

また、「個人とシステム」という課題を追究し、カルト教団のシステムの問題を重視しているの

であれば、論文全体のどこかで『アンダーグラウンド』『約束された場所で』を重点的に取り上げるべきだったのではないか、と感じられた。村上春樹は小説だけでなく、翻訳、エッセイ、ルポルタージュなど多方面で活躍する作家であり、多彩でありすぎるために本論文で小説に絞って考察をおこなったことは十分理解できる。ただし、上記 2 作品は本論文のテーマに密接にかかわる作品であるため、どこかで考察に含めることが必要だったのではないかと思われ、その点でやや物足りなさが感じられた。

こうした課題は最終試験において指摘されたものの、論者は適切な回答をおこない、これらの課題について自覚的であることを示していた。論者は大きな研究計画を持っており、今後の研究活動を視野に入れて、自らの計画に沿って研究を進めていくという方向性を具体的に把握していることが明らかであった。ここに示したような課題は、論者の今後の研究活動の中で真摯に取り組まれ、解決されていくものと考えられる。

5．結論

以上の点を総合的に考え合わせた結果、審査委員は本論文が研究史的に大きな意義を持つことを認め、全員一致で本論文に博士（文学）の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。